

英国の大学における日本語・日本文学 研究の史的展望と現状⁽¹⁾

井 上 英 明

はじめに

英国の大学において日本語・日本文学のアカデミックな講座が、いつ、いかなる理由によって創設され、どのような経緯をたどってこんにちに至ったかについては日本国内はもとより、英国国内においてもその実情を正確に把握している人は非常に少ない。とくに草創期の実体については誰も知るところがない。わたしは足かけ8年、ロンドン大学スクール・オブ・オリエンタル・アンド・アフリカン・スタディーズの日本文学科に在職し、教壇生活をつづけるうちに、こうした問題に興味をもたれる日本からの来客の先生がたに満足のゆく説明ができたためしがなく、質問を受けるたびに返答に窮するほかなかった。いまロンドン大学を辞任して住みなれた英国を去るにあたり、この国の日本学についてある程度確実な知識を得ることを願い、英国の大学に保存されている資料を調査してみた次第である。調べて完きを得たつもりは毛頭ないが、入手容易しえた資料をもとに、英国または英国人による日本語・日本文学の史的展望をはかり、あわせて現状を報告してみることにする。⁽²⁾

英国内で日本語・日本文学、その他日本学に関する学位 コースをもつ大学

第二次世界大戦後、英国も大学の数が増えたが、それでもたかだか四十数校にすぎない。この中で日本語・日本文学をはじめ、その他日本学による学位が与えられる大学はつぎの4校にかぎられる。

- (1) Cambridge University, Faculty for Oriental Studies.
- (2) Oxford University, The Oriental Institute,
St. Anton'y College, Far East Centre, Oxford Nissan Institute for
Japanese Studies.
- (3) University of Sheffield, Centre for Japanese Studies.
- (4) University of London, School of Oriental and African Studies.

(1)は1947から、(2)は1964年から、(3)は1966年から3年制ないし4年制の学位コースがスタートしているので、ケインブリッジ・オックスフォード・シェフィールドの三大学はすべて第二次世界大戦後のことに属するが、(4)は実質上1917年のスタートだから英国の大学では最も古いわけである。現在でも英国の日本学はこのロンドン大学のスクール・オブ・オリエンタル・アンド・アフリカン・スタディーズが質量ともにもっとも充実している。英国のアカデミズムにおける日本学はこのロンドン大学を中心に発展してきたといえるのであるが、その経緯はかなり複雑である。

英国人による日本学研究の歴史

(A) アカデミズムにおいて：

現存する確実な資料によると、ロンドン大学における日本学のスタートは1917年からではない。じつはそれ以前にさかのぼる。すなわちロンドン大学の40いくつかのカレッジの中で最も古い歴史をもつ King's College の^(1836創立) Oriental Department に1903年、日本学初代教授として J. H. Longford という学者が任命されている。1903年といえばその前年に日英同盟が結ばれ、その翌年1904年は日露戦争の年であるから、当時の日英間の国際政局を反映して興味しんしんたるものがある。ところが、このロングフォード教授⁽³⁾のもとでは聴講者は一人もなく、そのためにキングス・カレッジでの日本学の講義はついに一度も行なわれなかったらしい。キングス・カレッジ内の東洋学にたいする行政的・経済的基礎の不安定⁽⁴⁾ということが日本学講座設置失敗の主因をなしたといわれるが、ロングフォード教授は講義こそできなかつたものの、学生なしのいわゆるリサーチ・プロフェッサーとして日本についてのアカデミックな業績をつぎつぎと出版する。そしてついに1916年、キングス・カレッジのオリエンタル デパートメントが同じロンドン大学のスクール・オブ・オリエンタル・アンド・アフリカン・スタディーズに移されたとき⁽⁵⁾、ロングフォードはキングス・カレッジ日本学教授職を退き、著述活動もストップしてしまう。かくて英国の大学における草創期の日本学はすこぶる低調をきわめたものであったといわなくてはならない。英国人によって日本学が本格的に開始され、その第一次黄金時代が築かれたのはロンドンではなく、じつは幕末の江戸であり、明治維新の東京であった。

(B) 舞台はロンドンから江戸・東京へ——外交官による研究——

まず日本学の偉大なパイオニアたちはいわゆるプロの学者ではなく、外交官であった。その一番手は1859年(安政6)6月、駐日初代総領事兼外交代表として江戸に赴任した Rutherford Alcock (1809—1897) である。オールコックは翌年公使に昇任し、一時帰国後、1864年(元治1)公使として再来日、その年の暮れ四ヶ国艦隊による下関攻撃の件で本国に

召還されるまで、その日本滞在はまる3年に及んだ。オールコックは着任後、幕末の動乱期に寸暇を惜しんで日本研究に着手。来日2年後⁽⁶⁾の1861年(文久2)には早くも“Elements of Japanese Grammar for the use of Beginners”というタイトルで簡易文法書を上海で上梓し、つづいて翌年の1863年(文久3)に“Familiar Japanese Dialogues in Katakana and Roman Characters, with French and English Translation”なる仏英訳付き会話本をロンドンで出版する。オールコックの日本語研究は極東の一島国の珍奇な風俗にたいするロマンチックな憧憬などではなく、大英帝国の東洋市場獲得という、「死活の要素」に促されるものであった。したがってその日本語研究についての所感も名著“The Capital of The Tycoon — A Narrative of a Three Years’ Residence in Japan —” 2 Vols, 1863, (邦訳『大君の都—幕末日本滞在記—』上・中・下巻山口光朝氏訳岩波文庫)の上巻第8章「日本語—文法と会話の第一課—」に詳細に述べられている。オールコックがこの書物を書く気になったのは「われわれがまったく日本語の知識を欠いていることが、この国(日本)とわれわれとの関係を発展せしめて成果をあげるための最初の重大なさまたげとなった」からであり、そしてできあがった本は「18ヶ月のあいだ、くる日もくる日もくり返されたこの長い拷問の最後の結果だった」という。オールコックの日本語学習の助手はマタベという日本人の他に上海駐在のイギリス領事メドハーストや日本語を研究しながら多年琉球諸島にいたフランスの宣教師で、フランス総領事の通訳官を兼務したジラル師がいるだけだったという。オールコック上記二書はたとえ内容は幼稚なものであっても、とにかく⁽⁷⁾英国人の述作にかかる最初の日本語研究書であったといつてよい。オールコックの前にオランダ語とフランス語による日本語の本がすでに存在したが、彼はそのどちらからも直接影響はうけていない。オールコックが所持し、日本語研究⁽⁸⁾に利用しようとしたのは例の有名な Jaò Rodriguez (1561—1634) の “Arte Bre [ve] da Lingoa Lapoa” (『日本小文典』 Macao, 1620, のフランス語縮訳 “Elémens de la Grammaire Japonaise”, Paris 1825, であった。しかしこの仏訳本はポルトガル原書からの忠実な訳でないことと、ロドリゲスがこの本を書いたときの日本語とオールコックが耳にした日本語との時代差が2世紀半もあることからあまり、いやほとんど役に立たなかったようである。

二番手は Earnest Mason Satow (1843—1929) である。オールコックが来日したのは40歳のときで、滞日期間も3年間であり、維新後の日本を知らずに帰国したが、アーネスト・サトウのばあい日本との接触の長さにおいて、深さにおいて、また活動のはばにおいてオールコックとは比較にならない。1862(文久2)年9月8日、英国外交代表団通訳見習生として横浜に着く。19歳の若さであった。サトウは17歳でロンドン大学のユニバーシティー・カレッジに入学。わずか2年在学しただけで学士号を取得。ただちに江戸行きを希望したが北京へまわされる。オールコックが通訳見習生は日本での漢字習得の負担を軽減するために来日前に北京行きを提議したためといわれるが、しかしわずか4ヶ月で日本へ配置転換される。1862年5月8日オールコック公使が一時帰国したためであるが、アーネスト・サトウが横浜に着く前年は水戸浪士が高輪東禅寺のイギリス公使館を襲撃し、翌年サト

ウ着任の寸前の6月26日にはイギリス公使館守衛伊藤軍兵衛が公使館所属のイギリス兵2名を殺害して自刃する事件がおきている。くわえて着任の直後の9月14日には生麦事件がおこる。サトウは後、“A Diplomat in Japan—Autobiography—” 1921、(邦訳『—外交官の見た明治維新』上・下巻坂田精一氏訳、岩波文庫)を書くが、その第5章は「リチャードソンの殺害、日本語の研究」というすさまじい題がつけられ、まさに白刃をくぐる中での日本語の勉強ぶりが生々しく描き出されている。この第5章はさきにあげたオールコックの『大君の都』の第8章と好一対をなす。サトウは幕末の動乱を直接体験しつつただちに日本語研究に着手する。サトウもオールコックと同じように当時出版されていた日本語の参考書は入手できず、また入手しえてもほとんど役に立たなかった。サトウはただアメリカ人宣教師S・R・ブラウンが自著『会話体日本語』(当時上海で印刷されつつあり、ときどき著者のところに送られていた)の中の文章を復誦するのに耳を傾け、文法の説明をきき、さらに日本人で紀州和歌山出身の医師高岡要について『鳩翁道話』(柴田鳩翁著の『心学講義』)を読みながら、一方、高岡から草・楷の書簡文を学んでいく。19歳の若さだから語学習得の成果はオールコックとちがって大いにあがり、1866年⁽¹⁰⁾(慶応2)駐日英国公使館書記官に昇任。賜暇帰国。1870年(明治3)ふたたび書記官として維新後の東京に着任。1883年(明治16)賜暇帰国。1895年(明治28)、日本駐劄公使として来日。サトウは1900年(明治33)シナ駐劄公使に転ずるまでの38年間、そのうち通算25年間をほとんど日本との関係で過ごした外交官である。日本では薩道と号した。1906年(明治39)、帰英し、同年枢密顧問官 Privy Councillor となり、本国官界で力もち、その翌年にいよいよ英国の大学での日本学講座設立に動き出すが、これはまたあとで触れる。

アーネスト・サトウは日本の古今の文献に通曉し、50点にちかい翻訳・論著はパイオニアの仕事であるにもかかわらず、こんにちになお学術的価値を失わない。

三番手は前任者のオールコック、サトウほど外交官として政治的・行政的な活躍の舞台にはめぐまれなかったが、アイルランドのクイーンズ大学出身で、より学究肌の外交官であった。William George Aston (1840—1911)である。1864年(元治1)、江戸駐在英國公使館付日本語通訳生として来日。24歳。1875年(明治8)書記官補としてサトウとともに東京滞在、1880年(明治13)、神戸領事、1884年(明治17)朝鮮総領事(1886年まで)となったが、1889年(明治22)ふたたび東京駐在英國公使館勤務書記官に転じ、1889年(明治22)、49歳で辞任帰国する。帰国後は南デボン⁽¹¹⁾のビヤーに隠棲して著述に専念。サトウとともに日本学の確固とした基礎を築いた。

四番手に現われた⁽¹²⁾のは英国官界とは縁もゆかりもない白面の青年であった。この人こそそのち最も偉大な学者となり、東京帝国大学で日本語学・博言学を講じつつ、多くの日本人学者を育成し、かつ日本の宗教・神話・言語・文学の全域にわたり、学界に不朽の業績を残した王道・バシル・ホール・チェンバレンその人である。チェンバレンの極東への航海には持病の結核の根治と健康の増進という目的があったといわれているが、もともと極東はチェンバレン久恋の地であった。というのも、琉球列島にたいして最初の学術調査を

こころみた英国人の一人に英国海軍のキャプテン・バシール・ホールの名があるが、かれはチェンバランの外祖父にあたるからである。キャプテン・バシール・ホールは1816年、軍艦ライラ号の艦長として極東にやってきて、朝鮮・琉球沿岸を周行し、その測量調査に従事して、帰帆の途次にはセント・ヘレナに幽閉されていたナポレオンを訪ねたりしているが、そのときの航海の記録が、1818年ロンドンで出版された、“Account of a voyage of discovery to the west coast of Corea and great Loo Choo island”である。後年になってチェンバランが注いだ日本・琉球にたいする異常なまでの学問的情熱は、このかつての外祖父曾遊の地へのはるかなる憧憬の念からもたらした浅からぬ因縁によるのである。

いったい、欧米列強の太平洋開拓は1768年から79年にかけての英国海軍のキャプテン・ジェームス・クックあたりから学術調査を目的としたもの変わったが、19世紀に入ると、その航路はようやく極東にまで延びてきて、朝鮮・琉球沿岸の調査となった。バシール・ホール艦長の『朝鮮・琉球紀行』の出た同じ年の1818年にはやはり朝鮮・琉球海域での英国海軍艦艇の調査と、それにつづく難破の記録を伝えた John Mcleod の “Voyage of his Majesty's ship Alceste along the coast of Corea, to the Island of Lewchew, with an account of her Subsequent Shipwreck”, London, という紀行文が出ている。琉球列島はこうした当時最強の英国海軍をバックにした調査の他に、また一方では熱心な宣教師によって研究の基礎がすえられることになる。有名なバーナード・ジャン・ピーテルハイム博士 B. J. Beutelheim (1811-1870) である。ピーテルハイムはキリスト教宣教師として1846年から8年まで那覇に住みつき、1854-5年にかけて聖書を『琉球福音』として翻訳した。また、大英博物館にはピーテルハイムの稿本 “Elements or Contributing towards a Loochoo and Japanese Grammar-Loochoo” と “English-Loochoo Dictionary” が保存されている。この二つの稿本はけだし英国人による琉球語・日本語研究の嚆矢である。ピーテルハイムはこの間にあって1850年、琉球における3年間の宣教師活動についてのレポートを作っている。また1853年にはジョージ・スミスの『琉球及び琉球人』George Smith, “Lewchew and the Lewchewans,” London の著述がある。しかしこうした著述はロシアの作家ゴンチャロフなどの著作をふくめて、琉球に関する紀行・覚書・見聞録が主で、さきのピーテルハイムの職業・稿本を除いては学術的研究にはまだ一步というところであった。英国人による日本研究は琉球のほうが日本本土よりもずいぶん早かったとはいえ、本土が鎖国状態ではいかに遠くはなれていても十分な研究活動はできなかったのである。琉球に関してその言語・風俗・住民などについての本格的な学術研究の基礎をきづいたのは、ほかならぬのちのバシール・ホール・チェンバランである。チェンバランはこうした外祖父以来の英国人琉球学を知悉しながら飄然と明治6年5月横浜に着いたのであった。翌1874年(明治7)7月に築地の海軍兵学寮の英語教官となる。1880年(明治13)辞任一時帰国。1881年(明治14)ふたたび来日して兵学寮教官再任、1882年(明治15)6月辞任。1886年(明治19)4月、帝国大学文科大学教官(日本語・博覧学担当)、上田万

年(1880年卒)、芳賀矢一(1892年卒)を指導。1890年(明治23)3月一時帰国後、1891年には東京帝国大学名誉教師。そして1911年(明治44)離日してスイスのジュネーブ湖畔に隠棲するまでしばしば来日する。以上がチェンバレンの日本で経歴のあらましであるが、1886年(明治19)帝国文学部の教師に迎えられる以前に日本の古典詩歌と『古事記』の翻訳を中心とする古典語研究の大半を完成している。そしてアーネスト・サトウ、ジョージ・アストンとともに1870年代にかけての英国人による日本学の黄金時代を築くのである。とくにアストンを除く二者は主としてアーネスト・サトウの創刊した「アジア協会誌」Transactions of the Asiatic Society of Japan 紙上で健筆をふるった。三者のとりあげた対象は各方面にわたるが、いまそれらを神話・宗教・言語・文学関係のみに限ると、アーネスト・サトウはとくに神道や神話の研究・翻訳に業績を残し、アストンは比較言語学・日本文学史・古典文学・日本書紀・神道⁽¹⁵⁾・その他に画期的な論著・訳業を達成する。チェンバレンは琉球研究⁽¹⁶⁾の基礎を築き、古典文学を中心とする方言・修辞、比較文献学などの分野でフィールド・ワークという絶対の強味を發揮しながら、ヨーロッパの文献学や英国文化人類学の方法を駆使して神話や伝説にたいして新しい解釈を呈示した。西洋の神話・言語・人類・宗教・文学の各学者の著述に日本の資料が現われたのはこの三人の業績が出はじめてからである。

かくして明治維新以後の20年間、日本滞在中の英国人外交官・学者が日本語・日本文学研究で輝かしい成果をあげつつあったとき、英国本土ではいかなる変化がおこっていたか。ここでふたたび舞台を日本から英国に移してみる。

(C) ふたたび舞台は日本から英国へ——ロンドン大学SOASを中心として——

1906年(明治39)帰英したアーネスト・サトウは翌年、the Reay Committee から英国の大学に日本学学部設立の構想をもちかけられ、教授職の人選を委嘱される。19世紀末から20世紀初頭の英国の日本語教育・研究機関・結社としてはつぎのようなものがあった。まず、ロンドン大学のキングス・カレッジであるが、これはさきに述べたようにロングフォード教授のもとでほとんど活動していない。つぎにJapan Society が1891年が創立されていた。その創立目的は「英日両国民間の相互理解と友好感情を促進し、日本の言語・歴史・民話・科学・産業、さらには過去・現在にわたる日本国民の社会生活・経済条件、ひいては日本の事物一般の研究を助成」するというものであった。またサトウの肝煎りで会誌 Transactions of the Asiatic Society of Japan (通称 T.A.S.J.) が発刊され、すでにアストンの『日本紀』やチェンバレンの『古事記』の訳が紙上を飾っていた。さらに27年間日本滞在の経験をもつ実業家で国会議員の W.J. Shand が経営し、みづから教授する日本語学校がロンドンにあった。アーネスト・サトウは大学で日本語を担当する教授は古典語を教える能力をもつべしと考えた。サトウの胸中に浮かんだ英国人日本学教授はつぎの4人であった。すなわち、アストン、チェンバレン、ディキンズ、ギャビンズである。

1907年といえばサトウは66歳、アストンはすでに68歳、デボンに隠棲し著述に専念していたが、健康状態がかんばしくなかった。チェンバレンは58歳でまだ日本にいる。ここに新人が登場する。ディキンズである。フル・ネームを Fredrick Victor Dickins という。少時フランスで教育を受け、ロンドン大学で B.Sc と M.B の二つの学位を取り、英国海軍軍医将校として中国・日本に滞在 (1861—1886)、同時に法廷弁護士として1870年代には横浜にも居住、帰国後はロンドン大学事務副局長 (1882—1896)、同大学事務局長 (1896—1901) を務めた人物である。ディキンズは『百人一首』のもっとも早い英訳者であり (1866年)、他にも『忠臣蔵』⁽²⁸⁾『酒呑童子』『竹取の翁の物語』『古代・中世日本文典』などの述作がある。

ところでここに二通の不思議な書簡がある。差し出し人は1892年 (明治25) より1900年 (明治33) までロンドンに留学し、後、柳田国男と並んで民俗学の父といわれた南方熊楠である。

小生今しばらく英国へふみこたえたらケンブリッジかオクスフォード、いずれかの大学におかるべき日本学の助教授になる処を、常楠が小生の学資を送らざりしため、小生は二年ほど日本絵の才取りなどしてぶらつき居り、そのうちロンドン大学総長の世話で右の日本学教授となる筈の処へ南阿戦争起り、その事も中止の様子、且つ英国一同節儉自戒して日本の絵画など売れず。よって止を得ず帰朝せしなり。駒井某という新聞通信員が、其後渡英して件の助教授になり候。小生お蔭でこの人は大きな拾い物をしたるなり。 (大正四年三月山田栄太郎宛書簡)

南方熊楠の大才とロンドンにおける業績をもってすればケンブリッジであれ、オクスフォードであれ、日本学の助教授の資格は十分にあったと思われるが、この書簡の内容はいささかあやしい。まず文中、「ロンドン大学総長の世話」とあるが、ロンドン大学の総長は英国では Chancellor of University of London といい、歴代王室関係者を戴く純然たる名誉職で、大学の実質上の最高責任者は Vice-Chancellor とよばれる副総長である。ロンドン大学の総長が南方の日本学助教授就任の世話をしたとは考えられない。つぎに「駒井某という新聞通信員が、其後渡英して件の助教授になり候云々」の一節であるが、英国の大学では助教授を Reader といい、アメリカその他の国のごとく Assistant Professor とはよばない。Reader はよんで字のごとく読書家もしくは研究家の謂でその地位は高く、人数も少ない。ケンブリッジに「駒井」という「新聞通信員」がリーダーになったという記録は存在しない。南方の別の書簡では「ロンドン大学総長ジキンズの世話で、ケンブリッジ大学に日本学の講座を設け、アストンぐらいを教授とし、小生を助教授として永く英国に留めんとしたるなり。しかるに南阿戦争起り、(中略) 南阿戦争は永くつづき、ケンブリッジに日本学講座の話も立ち消えになったから、決然蚊帳のごとき洋服をまとうて帰国致し候。」 (大正14年1月矢吹宛書簡)⁽³⁰⁾ とある。

ロンドン大学事務局長 F.V. Dickins のこと⁽³¹⁾を南方がロンドン大学総長に過称していることは前述の経歴でおわかりいただけると思う。この書簡では教授は Aston が指命さ

れている。南方熊楠の最も権威ある伝記研究を出した笠井清氏によれば、笠井家蔵の宮武省三宛の未公開書簡ではこの日本学教授がアストンになっていたり、チェンバレンになっていたりするということである。そこでここに一つの憶測が生じる。英国の大学に日本学の講座を設け、その教授・助教授職⁽³²⁾について南方熊楠に語ったのは、おそらく彼と親交のあった当時のロンドン大学事務局長ディキンズだったであろう。ところでディキンズはどこからそうした情報を入手したかといえ、先にあげたロンドンにおける東洋学組織委員会 (the Reay Committee) の有力なメンバーの一人だった Redesdale 卿⁽³³⁾からであろう。レデスデル卿こと、A. B. Mitford は1866年、アーネスト・サトウが駐日英国公使館書記官に昇任したとき、二等書記官として江戸へ赴任し、サトウとは旧知の間柄となっている。サトウが日本駐劄公使となった1895年 (明治28) の日本は日清戦争の直後、三国干渉の際で、サトウはロシアの対日本政策に注意しつつ、日英同盟の構想をねりはじめる。サトウは1900年 (明治33) シナ駐劄公使に転じたが、ロシアの南下政策を抑えこむ日英同盟締結の裏工作に務める。英国は1899年南阿戦争を起し、ついに1902年日英同盟を結び、いわゆる光榮ある孤立を放棄し、その年3年つづいた南阿戦争は終わったが、二年後には日本は日英同盟をバックに対露会戦となる。サトウは日露講和が締結された翌年1906年に帰国し、レデスデル卿とともに英国大学における日本学講座教授職の人選に動きだすのである。枢密顧問官という要職にあり、かつ日本学の分野ですでにかくかくたる業績をあげていたサトウの the Reay Committee の中で発言は非常に大きなものであったにちがいない。そこで南方書翰の発言の経路はサトウ→レデスデル→ディキンズ→南方という風に解するのが自然である。しかし日本学講座の設置はなかなか実現しなかった。南方のいう南阿戦争による経済沈滞が原因であったかもしれないが、ひょっとすると英国側はサトウの帰国待ちであったかもしれない。そのへんの事情はディキンズ程度の地位ではわからない。前述のごとく、対露戦略を軸に日英の国際的情況を正確につかんでいたのはサトウであり、ディキンズはいつしか洩れてきた日本語講座の噂とその実現のはかばかしからぬ理由を、いま英国はアフリカで戦争していて大変だ、という一般論として南方を、あるいはよろこばせ、あるいはなぐさめたのではなかったか。

1908年 (明治41) the Reay Committee は School of Oriental Studies をロンドン大学内に設置することを勧告する。ついにサトウ自身が教授に推薦されるが、これを断っている。サトウの胸中にあったさきの4人の候補者はみな老齢で応募しなかった。ただ、1909年に4人のうち、ただ一人50代の J. H. Gubbins が突然オックフォード大学の日本語学講師に任命される。年俸 250ポンドを支給されてスタートしたが、聴講生は一人もなく、1912年には退職する。後任者もなかった。

1906年から1916年にかけての10年間⁽³⁴⁾は英国国内での日本学はまったくふるわなかった。さきの W. J. Shand が “Japanese Self-taught” を出し、F. S. G. Piggott が “The Elements of Sōsho” を書いただけである。

The Reay Committee が日本学講座の設立を提唱してから11年目の1917年、キングス

・カレッジのオリエンタル・デパートメントがスクール・オブ・オリエンタル・アンド・アフリカン・スタディーズ（以下 SOAS と略称）に移されたとき、ようやくして日本学の授業が始められた。しかしサトウはこのとき74歳、すでに官を退き、デボンシャーのオタリ・セント・メリーに隠棲して晴耕雨読の毎日、アストンは6年前に死亡、チェンバレンはスイスの隠棲地から英国に帰る意志はなかった。そこで SOAS は外交官のジョージ・サムソンを初代主任教授に招こうとするがこれに失敗、サムソンはのちアメリカのコロンビア大学の東アジア研究所のダイレクターとなり、日本史学の世界的権威となる。SOAS の日本語科は Mr. Bonar という英国人と、Mr. Kato という日本人教師によってとにかくはじめられた。初年度の学生数はわずか7名を数えるにすぎなかったが、1920年代からやや発展のきざしがみえてくる。まず、この年には竜谷大学に学び、西本願寺名誉僧侶の資格をもつ英国人 W. M. McGovern 氏が講師として加わり、英国在住の日本人、S. Yoshitake 氏が23年から講師となる。21年には N. E. Isemonger 氏が講師となっている。この三人の講師は前の二人とちがってアカデミックな学者として仕事を残している。マックガバン講師はわずか3年で辞任するが、あとの二人は第二次世界大戦中も教壇⁽³⁵⁾を去らなかつた。とくに Yoshitake 講師は日本人として敵国の中にあり、1942年死亡するまで、SOAS にとどまり、陰鬱な日々とたたかいながら、主として日本語の音韻の研究に没頭したといわれる。1902年に結ばれていた日英同盟はもともと極東進出をはかるロシアを牽制し、中国と英領インドの現状維持を目的とした攻守同盟条約であり、日英両国の植民地保全という利害関係のみによったものであるから、両国間に真の友好関係——文化的・學術的——はあのロンドン・ジャパン・ソサエティ創立の高らかなスローガンがあつたにかかわらず、なかなか生まれなかつた。それでも SOAS 日本学科の学生数は最初の5年間は年平均27名、1923年から41年までには年平均11名を数えて盛況のようである。しかし、この24年間に日本学で学士号を得たのはわずか1名^(1938年)、さらに M. A. の学位を得たのも1名である。SOAS の M. A. 第1号の取得者は英国人学生ではなく、ドイツから亡命してきていた、現在の上智大学の J. ロゲンドルフ教授である。修士論文のテーマは『伊勢物語』についてであった。学生の数は一応の線を保ちえても卒業して学位がとれないのはいったい何を意味するのか。第一に日本語・日本文化にたいする尊敬の念がなかつたことである。第2に日本学で学位をとっても職場がなかつたことである。東洋にたいする植民地主義的な優越感からくる異国情緒を満足させる研究者はすでに前世紀からの金持ちの道楽であつた。ロンドン大学は市民の大学である。日英関係は1931年（昭和6）の満州事変を境に悪化の一途をたどる。そしてそのピークはいうまでもなく1945年12月8日、日本海軍の真珠湾奇襲作戦以降である。1941年頃から SOAS の日本学科は未曾有の事態となる。学生数が一度に200名を越えたのである。英国人による日本語・日本学研究の第二次黄金時代が現出した。しかしそれは「汝ノ敵ヲ知レ」という、いままでよりもいっそう苛酷な現実⁽³⁶⁾に裏打ちされたものであつた。英国の大学における日本語・日本文学研究の現状はじつはここから説きおこさなければならない。だが、本誌の制限紙数も尽き、拙文標題の完結は別の機会にゆ

だねなければならない。

注

- (1) 小論の概要はすでに梅光女学院大学第 144 回日本文学例会（昭和 57 年 2 月 5 日於梅光女学院大学文学部）の席上で話し、さらに日本比較文学会第 44 回全国大会（昭和 57 年 5 月 23 日於東京大学教養部）において口頭発表したものである。そのさい司会の労をとられた東北大学の菊田茂男教授、発表の機会をつくるのに心を尽された日本大学の富田仁教授に深甚なる謝意を表わしたい。
- (2) 小論を書くにあたってロンドン大学名誉教授フランク・J・ダニエルズ先生の名をぜひともあげておかねばならない。ダニエルズ教授はわたしの前任校ロンドン大学スクール・オブ・オリエンタル・スタディーズの日本文学科の育ての親であり、「英国の大学における日本語・日本文学研究の史的展望と現状」を語ることのできる唯一の生き証人でもある。わたしは八十歳を越え、左眼の明を失してなお畢生の大著『日本語の研究』に没頭する老先生をセント・ジョンズ・ウッドの私宅にしばしばたずねては、英国人の日本研究についてぶしつけな質問した。そのさい先生からいただいた抜き刷りの中に、“JAPANESE STUDIES IN THE UNIVERSITY OF LONDON AND ELSEWHERE—An Inaugural Lecture Deliverered on 7 November 1962—By F. J. DANIELS. (S. O. A. S. Univ. of London, 1963.)” があり、これはダニエルズ先生のロンドン大学日本語科主任教授就任演説の全文を録したものである。小論の英国サイドの資料はほとんどダニエルズ教授の上記抜き刷りの文と教授自身から直接伺った事実とに導かれている。いま拙文を公表するにあたり、はるか英京のフランク・ダニエルズ教授の健在を祈ること切なるものがある。記して感謝の誠を捧げるゆえんである。
- (3) キングス・カレッジの当時の事務長 I. P. Shaw 氏がダニエルズ教授に提供した同校保管の資料。“King's Collcge Council Minutes”, 22. May. 1903. と “King's College Delegacy Minutes”, 11, July, 1916, Section (6), ダニエルズ・注(2)所引の論文 P. 27 の NOTES 1 に引く。
- (4) とくに 1906—7 年, 1907—8 年の二学期は全然授業が行なわれていないという確証があがっている。“Reay Committee Report, 1909, p. 66 (Appendix V, Table) “Minute of Evideuce” 1909, P. 238 (Question 6106) ダニエルズ、注(2)所引の論文 P. 27 の Notes, 2, 3 に引き、その間のいきさつについてダニエルズは想像的注記をほどこす。
- (5) “A Summary of the Japanese Penal Codes”, Yokohama, 1877. (井上注, 当時日本政府は外人裁判官任用をめぐり、いぜん英国政府との交渉が難航していた。治外法権の撤廃に成功するのは 1894 年であり、条約改正の実施に踏みきったのは 1899 年のことである。本書は治外法権時代の刑法の書として貴重なものである。) “Japan” in “The Story of the Nations”, by D. MURRY, 1904. “On Japan” in “The Living Races of Mankind”, by H. N. Hatchinson, 1905. “The Story of Old Japan” 1910. “The Evolution of New Japan, 1910. “Revised and Edited “A History of Japan, iii. (The Tokugawa Epock 1652—1868)”, by J. Murdock, 1910. Contributed Chapter XVIII, “The Regeneration of Japan”, to “The Cambridge Modern History, xii. (The Latest Age) 1910.

- “Japan of the Japanese”, 1912. (2nd ed., 1915).
 Revised and Corrected, Adding a Final Chapter (1904—12).
 to “Europe and the Far East 1506—1912, by R.K.Douglas. 1913.
- (6) オールコックの経歴は山口光朔訳『大君の都』下巻「あとがき」, Alexander Michie, “The Englishman in China During the Victoria”, 2 vols., Edinburgh & London, 1900. 外交文書としては, Seiichi Iwano (ed), “List of The Foreign Office Records Preserved in the Public Record Office in London Relating to China and Japan”, Tokyo, 1959, etc.
- (7) 『大君の都』上巻 山口光朔訳 第8章「日本語—文法と会話の第一課—」 P. 257—277.
- (8) D.Curtius, J. Hoffmann, “Proeve eener japansche spraakkunst; toegelicht, verbeterd en met uitgebreide bijvoegselen vermeerderd”, Leyden, 1857.
 Leon de Rosny, “Introduction à l'étude de la langue japonaise”, Paris, 1857.
- (9) C. R. Boxer. “Padre João Rodriguez Tçuzu S. J. and his Japanese grammar of 1604 and 1620,” Lisbon, 1950. に “Arte Grande” と “Arte Breve” の異同が明らかにされている。F. J. Daniels は注 (1) 所引の論文で「小文典」の引用日本語と仏訳のそれとに相異なることを実例をあげて明示している。ibid, P. 28. Note 7.
- (10) 坂田精一訳「一外交官の見た明治維新」上, 第5章, 「リチャードソンの殺害, 日本語の研究」 P. 58—72.
- (11) アーネスト・サトウの経歴及び業績は, 注(10)の坂田精一氏訳の「付録」—アーネスト・サトウの略伝・サトウの著述目録・当時の日本の政情—や, B. M. Allen, “The Rt. Hon. Sir Ernest Satow, A Memoir”, Fr. Von, Wenckstern, “Bibliography of Japan,” Vol. I, 1477—1893. ed, 1895. Vol. II 1894—1906. ed, 1907. “D. N. B.” 1922—1930, 『日本文学大辞典』(新潮社)に詳しい。
- (12) ウィリアム・ジョージ・アストンの経歴及び業績 “D. B. N.” Second Supplement, 1901—11. “The Times,” 23. Nov. 1911. 2nd, Feb, 1912. Fr. Von. Wenckstern, ibid. 『日本文学大辞典』(新潮社)などによって知ることができる。
- (13) B. J. Beetelheim, “Letter Giving an Account of his Residence and Missionary Labours in Lewchew During the Last Three Years.”— Chinese Repository, Canton, 19: 17—49, 57—89, 1850.
- (14) チェンバレンの経歴・著述は『日本文学大辞典』(前掲)と “Transactions and Proceedings of the Japan Society”, London, xxxii, (1934—5), pp. xi—xv 生涯の大半を日本サイドで送った人だけに英国サイドからの資料が少ない。
- (15) “Shintau Temples of Ise”—J. A. S. J. VOL. II. 1874.
 “The Revival of Pure Shintau”—J. A. S. J. VOL. II. 1875.
 “Ancient Japanese Rituals,”—J. A. S. J. VOL. II. 1879.
 “The Mythology and Religious Worship of the Ancient Japanese”—Westminster Review, July. 1898.
- (16) “Norito” (「祈年祭」より「御門祭」まで9章翻訳) 1879—1881.
- (17) “Has Japanese an Affinity with the Aryan Language?—T. A. S. J. VOL. II. 1874.
 “A Comparative Study of the Japanese and Korean Language”—Journal

- of Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, VOL. III. 1879.
- "On the Leochuan and the Aino Languages" — Church Missionary Intelligence, 1879.
- "Japanese Onomatopoeia and Origin of Language" — Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland, VOL. I, XXIII, 1894.
- (18) "A History of Japanese Literature" — New York, (1899, 仏訳, H.D. Davray, Paris, 1902. 邦訳, R. Shibano, Tokyo, 1908.)
- (19) "The Classical Literature of Japan (8th to 12th Century) — Transactions and Proceedings of Japan Society, VOL. IV, London, 1899.
- "Tosa Nikki." 1876. — [Japanese Classics, 1926]
- (20) "Nihongi" 2 Vols, London, 1896.
- (21) "Ancestor Worship in Japan" —, Man, VOL. IV, 1906.
- "Kämpfer as an authority, on Shinto" — Man, VOL. II, 1902.
- "Shinto, — the way of Gods." London, 1905.
- (22) "Japanese Mythology" — Folklore, VOL. X, 1899.
- (23) "Essay in an aid of a Grammar and dictionary of the Luchuan Language" — Supplement to T. A. S. J. xxiii, 1895.
- "On the Loochooan Language" — British Association for the Advancement of Science, 6th meeting, 1894.
- "Comparison of the Japanese and Luchuan Language" — T. A. S. J. xxii, 1895.
- "Contribution to a bibliography of Luchu" — T. A. S. J. xxiv, 1896.
- (24) "Notes on Japanese philology" — The Chrysanthemum and Phoenix, iii, March, 1883, May, 1883.
- (25) "Kojiki, or Record of Ancient Matters" — the Asiatic Society of Japan, 12th, April, 10th, May, and 21st, June, 1882. 3回にわたって朗読され、後、T. A. S. J. May, 1919. に再録される。
- その他、文学・言語関係で重要なものとしては —
- "On the use of Pillow — words and plays upon word in Japanese poetry" — T. A. S. J. 1877.
- "Yamato Monogatari" — T. A. S. J. 1878.
- "On the mediaeval colloquial dialogue of the Comedies" — T. A. S. J. 1879.
- "The Classical poetry of the Japanese." — T. A. S. J. 1880.
- "Notes on the dialect spoken in Ahidze" — T. A. S. J. 1881.
- (26) F. J. Daniels. 注(1)所引の論文 P. 12.
- (27) 1903年設立。1907年までに生徒数は76名。F. J. Daniels 注(1)所引論文。P. 12.
- (28) ディキンズの経歴・業績は "Who was Who 1897—1915"
- "Wiltshire Archaeological and Natural History Magazine" xxxix(1915—17) pp. 273—7. "Nature" 26th. Aug, 1915. "Wiltshire Gazette" 26th, Aug, 1915. 所載の追悼文。
- (29) "Hyaku nin Is'shu" 1866. "Chiushingura, or the Loyal League." "The Story of Shiuten Dōji", "Taketori no Okina no Monogatari", "Primitive and Mediaeval Japanese Text."

- ③① 『南方熊楠全集』 (平凡社版) 別巻 1, P. 321—322.
- ③② 同上, 第 7 巻, P. 24.
- ③③ 笠井清『南方熊楠一人と学問—』 (吉川弘文館, 1980.) P. 192—193.
- ③④ 本名を Algernon B. Mitford といい, “Tale of Old Japan” の著者。
- ③⑤ John Harrington Gubbins. 駐日通訳見習生, 領事, 駐日英国大使館書記官。著作としては “Dictionary of Sino—Japanese words with Characters” 経歴その他に関しては F. S. G. Piggott “Bulletin” No. 3. of Japan Society of London, Feb, 1951.
- ③⑥ W. M. McGovern,
“The Development of Japanese Buddhism”, Chicago, 1919.
“Modern Japan : its Political, Military, and Industrial Organisation”
1920.
“Colloquial Japanese” 1920.
“An Introduction to Mahāyāna Buddhism, with Special Reference to Chinese and Japanese phases”. 1922.
- S. Yoshitake,
“Japanese” (Linguaphone miniature Language Series). 1932.
“The Phonetic System of Ancient Japanese” (Jas. G. Forlong Fund,
VOL. xii). 1934.
- N. E. Isemonger,
“The Elements of Japanese Writing (Jas. G. Forlong Series, Vol, viii).
1929.
- ③⑦ ダニエルズ, 注 (1) 所引の論文。